

広島修道大学人文学部英語英文学科における カリキュラム改善に向けての基礎的研究*

大澤 真也・水野 和穂

(受付 2013年10月31日)

1. はじめに

広島修道大学人文学部英語英文学科では、2007年のカリキュラム改正において4技能を有機的に結びつけた科目を設置し、より効果的な英語教育カリキュラムへの転換を目指した。その後、科目コーディネータ制を導入し、複数教員が担当する同一科目において専任教員がコーディネータとなり科目の内容をできるだけ統一するように試みるなど、内容の充実を図ってきた。現在は2016年度の新カリキュラム導入に向けてワーキンググループを設置し、議論をしているところである。その流れの中で、本学における教育改善に寄与する試みに対して支給される「教育成果指標の開発支援」事業予算が2011年度に新設されたのを受け、英語英文学科ではこの予算を利用してカリキュラム改善につながる予備的な調査を開始することになった。本学の学生は広島県内出身の者が80%前後と多く、県内で就職する者が多いことから、調査のテーマは「地域が必要とする英語力育成のための教育成果指標開発」にした。本稿では調査の背景および概要を報告するとともに、カリキュラム改善にあたっての課題についても検討したい。

2. 英語英文学科カリキュラムについて

英語英文学科のカリキュラムでは1, 2年次を英語スキル養成の期間と位置づけ、3, 4年次に行うゼミナールや専門科目、そして卒業研究につなげることを意識している。具体的な科目名称は以下の通りである（Listeningは1年次後期まで、それ以外は2年次の後期まで開講）。

Progress in English I, II, III, IV

Listening I, II

* 本研究は、2011-13年度広島修道大学教育成果指標の開発支援事業（人文学部英語英文学科「地域が必要とする英語力育成のための教育成果指標開発」）助成金に基づく調査報告の一部である。

Speaking I, II, III, IV

Reading & Writing I, II, III, IV

Reading & Grammar I, II, III, IV

Progress in English においては共通テキストを指定し、1 年次は日本人教員が担当してテキストを読み込み、2 年次に英語母語話者の教員が担当して、テキストの内容について英語でプレゼンテーションができるようになることを目指している。また Writing や Grammar においてはインプットの重要性を意識し、リーディングによるインプットに基づいて英作文を行ったり文法を学んだりすることを目指している。

また学科のカリキュラムポリシーの1つである「英語圏の文学・文化と英語学・英語教育に関する専門的知識の修得にむけて、自専攻科目の中にそれぞれの分野の科目を体系的に配置する。学士課程における学修成果の集大成として卒業研究を必修とする」に基づき、以下の履修モデル（図1）が示すように2年次より「地域文化研究コース」と「言語研究コース」の2コースを設け、3、4年次のゼミナールで専門性を高め、4年次に学生各自のテーマに基づき卒業研究としてまとめることとなっている。

語彙力の強化を目的に英語力の土台を築く	基礎力の向上を目指すとともに TOEIC などの目標得点の到達を目指す	少人数ゼミに所属し、自分自身のテーマを追求する	研究テーマをより深め、卒業研究としてまとめる
1 年次	2 年次	3 年次	4 年次
英語力養成系科目（基礎必修科目）		英語力養成系科目（応用選択科目）	
Progress in English I-IV, Listening I-II, Speaking I-IV, Reading & Grammar I-IV, Reading & Writing I-IV		Presentation & Discussion I-II, Project Work I-II, Writing & Presentaion I-II, 翻訳研究 I-II	
		ゼミナール I-IV	
	地域文化研究コース	英米の言語文化 I-VI, 言語文化研究 I-II, 地域文化研究 I-III, 地域文化研究特講 I-V	
	言語研究コース	言語学入門 I-II, 英語音声学, 英語の諸相 I-IV, 英語研究 I-III, 英語研究特講, 言語教育特講	
		卒業研究	
資格試験対策科目	Reading for TOEIC I-II, Preperation for TOEFL I-II, Media English, Bussiness English		
留学プログラム	交換留学, 英語セミナー (Warwick, Kent State, Westminster, Arizona State, Christchurch Poytechnic), 中国語セミナー, 韓国語セミナー, 認定留学		

図 1. 英語英文学科における履修モデル

このカリキュラムにおける問題の1つとして挙げられるのは語彙指導の不足である。各科目において必要な語彙の指導を行ってはいないものの、カリキュラムの中には明確に位置づけられておらず、各教員の裁量に任されているのが現状である。そのため、最初の2年間の指導にもかかわらず、3年次になった時に卒業研究に必要な文献を読むだけの英語力に達していないという声が教員から聞こえてくることも多い。また学科としてどのような英語力を育成しようとしているかという共通認識がないこともまた問題である。そのため、1, 2年次に受験させる TOEIC のスコア以外に英語英文学科の学生の英語力を評価するための適切な指標が存在していない。

3. 2011年度の調査

以上のような問題意識に基づき、2011年度はまず学生のニーズを明らかにするために在学生へのインタビューを行った。そして教員が学生にどのような英語力を身につけてもらいたいと考えているかを明らかにするために、教員推薦図書のエレクトロニクス化および語彙リストの簡易な分析を行った。

3.1 学生に対するインタビュー調査

教員は自分が正しいと思うやり方で教育を行うが、実際に教育を受けている学生はどう思っているのだろうか。そこで、本学の英語英文学科に在籍する学生を対象に、インタビュー形式で調査を行うことにした。対象としたのは1年次生2名、4年次生2名である。4名とも学習意欲が高く成績も優秀な学生である。入り口である1年次で考えていることと卒業、つまり出口に近づいた時点で考えていることを明らかにすることによって、英語英文学科の教育成果指標の開発やカリキュラム改善につながる示唆を得ることができると考えた。なお半構造化インタビュー法を採用し、主に大学入学の動機、高校時代の本学に対するイメージ、本学で受講した授業、学習や就職に対するサポート、英語力が上がった実感などに関する質問を行った。インタビュー時間はそれぞれ約30分で、やり取りをすべて文字化した。以下、項目ごとに簡単なまとめをおこなっておく。

大学入学の動機

- ・4名とも国公立大学などを志望しており、本学が第1志望ではなかった。

高校時代の本学に対するイメージ

- ・あまり良いイメージではない。どちらかと言えば「滑り止め」。
- ・留学プログラムが多様である。

- ・学生に自主性があり，自由な校風である。

本学で受講した授業

- ・担当教員によって授業内容に差がある。
- ・「スピーキング」は担当教員によっては物足りない。
- ・熟達度によってクラス分けをした方が良い。
- ・英語に関連しない授業を多く履修しても卒業できてしまう。

学習や就職に対するサポート

- ・満足している。
- ・使い方を知らない学生が多い。

英語力が上がった実感

- ・あまりない。
- ・リーディング力などは向上した。

今回のインタビュー調査で明らかになったことは4名とも大きな不満は抱いていないということである。特に学習や就職におけるサポートや留学プログラムなどにおいては高い評価をしている者が多かった。その一方で問題なのは、「授業に対する不公平感」である。特に同一科目名なのに担当教員によって内容にばらつきがあることや、英語力が高い層と低い層が混在しているクラスに対する批判が見られた。また残念なことに4年間の学習を通じて、英語力が上がったという実感をあまり持てていないようである。またインタビューの最後に「広島修道大学を後輩に自信を持って勧められるか？」という質問を行ったが、「大学生活が楽しく」「サポートがきめ細やかである」という点においては勧められるものの、「英語力が向上する」という観点においては言及がなかった。

今回のインタビューへの協力者を選ぶにあたって、特別な基準は設けなかった。今後は成績優秀者とそうでない者との比較を行ったり、今回インタビューを行った1年次生に2～4年次においても協力してもらい、継続的な調査を行うなどの方向性が考えられる。また今回のインタビューで明らかになったのは、「授業に対する不公平感」そして「英語力が上がった実感の欠如」である。このことからやはり英語英文学科における学習を支える語彙リストをはじめとした適切な教材そして4年間の学習の効果を適切に評価するための指標が必要なることがわかる。

3.2 コーパスの作成

近年、言語学そして英語教育研究の分野においてコーパスが注目を集めており、数多くの研究が行われている。石川（2008）によればコーパスとは「自然な言語データをバランスよ

く電子的に集めたもの (p.6)」である。別の言い方をすれば、ある人が分析を行いたいと考える対象の言語データを集約するものであり、そこから語彙リストの作成をはじめとして様々な分析を行うことができる。今回は、英語英文学科に所属する教員12名に協力を仰ぎ、英語英文学科の学生に読ませたい書籍を推薦してもらった。全教員の協力を得て計68冊の書籍リストができあがり、絶版および入手不可のものを除いて書籍を入手した。その後、書籍の裁断、電子データ化、そして電子データの正確さのチェックを経て、「広島修道大学英語英文学科所属教員が学生に読んでもらいたいと考える英語コーパス (仮称)」が完成した。

書籍を電子データ化する作業は予想以上に困難なものであった。特にフォントに装飾があるものやテキスト中に図表などがある場合は、正確にデータ化されない場合が多々あったため、データを手作業ですべて確認するという工程を経なければ、コーパスとしての利用に耐えうるデータにすることができなかった。そのため2011年度においては簡単な分析に留め、2012年度にコーパスデータの分析を行った。

4. 2012年度の調査

2011年度の取組に続いて、2012年度においては語彙リストの作成を行うとともに、新たに学生および企業への質問紙調査を行うことにした。紙幅の都合により、本論文では質問紙調査の結果については別の機会に譲ることとし、語彙リストの作成について述べることにする。

4.1 コース別語彙リスト

コース別語彙リスト作成の目的は、専門性の高い地域文化研究コースと言語研究コースの科目(「ゼミナール」も含む)を履修する際に必要となる語彙を明示するとともに、それらを効率的に行える語彙学習教材開発に向けての基礎データとするためである。

作成方法は、まず、電子データ化した文献を地域文化研究コース用と言語研究コース用の2グループに分け、それぞれ電子化した文献を結合した。次に、言語分析ソフトであるWordSmithを利用してそれぞれの高頻度リストを作成した。なお、専門性の高いコース別語彙リスト作成という目的のため、英語スキル授業で利用するテキストデータは対象外とすることとした。また、単純な高頻度語彙リストではなく、日本人英語学習者のための科学的語彙表を目指して編纂されたJACET 8000を参照し、リスト化する語彙はJACET 8000のLevel 4以上、すなわち、「大学受験、大学一般教養の初級レベル」以上の語彙に限定した。そして、各語にはそれぞれJACET 8000の難易度レベルを付与し、より利用価値のあるものにした。JACET 8000の各レベルについては表1に示す。

表 1. JACET 8000の各レベル

順位	レ	ベ	ル
Level 1	-1000	中学校の英語教科書に頻出する基本的な単語	
Level 2	1001-2000	高校初級レベル	
Level 3	2001-3000	高等学校の英語教科書レベル	
Level 4	3001-4000	大学受験, 大学一般教養の初級レベル	
Level 5	4001-5000	難関大学受験, 大学一般教養レベル	
Level 6	5001-6000	英語を専門としない大学生やビジネスマンが目指すべきレベル	
Level 7	6001-7000	英語専攻の大学生や英語を仕事で使うビジネスマンが到達目標とするレベル	
Level 8	7001-	日本人英語学習者の最終到達目標	

次の表 2 は、上記の手順に従って作成した対象データベース中の JACET 8000 Level 4以上の語彙の上位100位までの高頻度順リストである。表中の“Raw Freq. (=Raw Frequencies)”は純粋な生起数, “N. Freq. (=Normalized Frequencies)”はデータ100万語中に生起すると予想される頻度をそれぞれ示す。地域文化研究コース用文献は約315万語, 言語研究コース用文献は約185万語であり, 各コース用データベースの総語彙数が異なるので, 各語彙のコース別の頻度を比較したい場合は, “N. Freq.”の数値を利用することで可能である。

表 2 から読み取れることは, (1) JACET 8000 Level 1から 3 の日常基本語彙が除外されているため, 両コースに共通する語彙が少ない。この語彙リストからだけでも, 学生は地域文化研究コースと言語研究コースでは性質の異なる英文に接することがわかる。(2) どちらのコースのリストも JACET 8000 Level 7, 8の難易度の高い語彙が10%以上(地域文化研究コース用文献は12語, 言語研究コース用文献は10語)を占めている。このことから, 英語英文学科の専門課程における語彙習得には, JACET 8000を代表とする市販の単語集がリストアップする語彙を易しい順に学習しても, 必ずしも効率的ではないことがわかる。(3) 言語研究コース用文献のリストには, 多くの言語学専門用語が見受けられる。加えて“N. Freq.”の数値より, それらの専門用語は繰り返しテキスト中に現れることがわかる。つまり, 言語研究コースを選択した学生は早い段階で高頻度の言語学専門用語を習得することにより, 言語理論の理解といった本質的な学習に多くの時間を費やすことが可能となるであろう。

表 2. コース別高頻度順語彙リスト（上位100位）

地域文化研究コース					言語研究コース				
Rank	Word	Raw Freq.	N.Freq.	JACET Level	Rank	Word	Raw Freq.	N.Freq.	JACET Level
1	works	1935	613	4	1	used	3502	1890.4	4
2	writing	1180	373.8	4	2	learning	3131	1690.2	4
3	verse	1116	353.6	4	3	learner	3006	1622.7	5
4	novelist	1099	348.2	6	4	vocabulary	2441	1317.7	5
5	used	985	312.1	4	5	teaching	2392	1291.2	4
6	coming	959	303.8	4	6	verb	2302	1242.6	5
7	married	754	238.9	4	7	chapter	2066	1115.3	4
8	edition	742	235.1	4	8	writing	1460	788.1	4
9	merry	741	234.8	<u>7</u>	9	reading	1406	759	4
10	prose	669	211.9	6	10	analysis	1196	645.6	4
11	edit	659	208.8	4	11	dialect	1177	635.4	6
12	ed.	650	205.9	6	12	grammatical	1081	583.5	6
13	dwarf	608	192.6	6	13	pronunciation	917	495	<u>7</u>
14	talking	563	178.4	6	14	terms	914	493.4	4
15	narrative	562	178	5	15	e.g.	893	482.1	4
16	living	552	174.9	4	16	noun	876	472.9	6
17	continued	539	170.8	4	17	category	766	413.5	4
18	standing	522	165.4	5	18	complement	760	410.3	6
19	biography	489	154.9	5	19	i.e.	746	402.7	4
20	romance	480	152.1	5	20	spelling	745	402.2	6
21	printed	456	144.5	5	21	clause	661	356.8	4
22	modem	435	137.8	<u>8</u>	22	qualitative	641	346	<u>7</u>
23	review	428	135.6	4	23	auxiliary	637	343.9	<u>8</u>
24	ore	417	132.1	<u>7</u>	24	instance	624	336.8	4
25	reading	400	126.7	4	25	tense	606	327.1	6
26	thou	397	125.8	6	26	linguistics	592	319.6	6
27	waiting	382	121	4	27	pronoun	589	317.9	<u>8</u>
28	running	377	119.4	4	28	objective	588	317.4	4
29	publication	371	117.5	4	29	reference	581	313.6	4
30	walking	370	117.2	6	30	relevant	574	309.9	4
31	plot	362	114.7	4	31	interaction	571	308.2	4

32	thee	359	113.7	5	32	procedure	554	299.1	4
33	autobiography	349	110.6	<u>8</u>	33	variation	532	287.2	4
34	memoir	348	110.2	<u>7</u>	34	vs.	529	285.6	4
35	witch	345	109.3	5	35	utterance	492	265.6	5
36	moving	330	104.5	4	36	lexical	492	265.6	6
37	notably	319	101.1	4	37	discourse	482	260.2	4
38	manuscript	319	101.1	5	38	constituent	479	258.6	5
39	influential	318	100.7	4	39	according	469	253.2	4
40	established	315	99.8	4	40	related	458	247.2	4
41	journal	308	97.6	4	41	sequence	451	243.5	4
42	setting	308	97.6	4	42	applied	447	241.3	5
43	elf	308	97.6	<u>7</u>	43	participant	442	238.6	4
44	finished	304	96.3	6	44	involved	433	233.7	4
45	raised	295	93.5	6	45	definition	422	227.8	4
46	working	294	93.1	4	46	syntax	421	227.3	<u>7</u>
47	growing	290	91.9	4	47	acquisition	408	220.2	4
48	thy	288	91.2	6	48	working	401	216.5	4
49	knight	282	89.3	5	49	quantitative	395	213.2	6
50	lyric	280	88.7	<u>7</u>	50	label	389	210	4
51	closed	279	88.4	5	51	derive	374	201.9	4
52	presently	276	87.4	5	52	adjective	371	200.3	6
53	added	274	86.8	5	53	pronounce	369	199.2	5
54	rhyme	272	86.2	<u>7</u>	54	associated	366	197.6	5
55	opera	270	85.5	4	55	variable	361	194.9	4
56	damn	267	84.6	5	56	developed	357	192.7	5
57	lad	260	82.4	4	57	provided	355	191.6	4
58	earl	257	81.4	4	58	usage	354	191.1	5
59	terror	257	81.4	4	59	regional	351	189.5	4
60	madam	255	80.8	6	60	construction	345	186.2	4
61	poetic	252	79.8	6	61	distinction	333	179.8	4
62	goddamn	248	78.6	4	62	assessment	328	177.1	4
63	rising	245	77.6	5	63	hence	327	176.5	4
64	creep	242	76.7	4	64	infinitive	323	174.4	<u>7</u>
65	jewel	242	76.7	6	65	component	321	173.3	4
66	fling	241	76.3	5	66	questionnaire	320	172.7	5

67	mutter	239	75.7	4	67	curriculum	317	171.1	4
68	genre	237	75.1	6	68	merge	316	170.6	5
69	epic	233	73.8	<u>7</u>	69	comprehension	313	169	<u>7</u>
70	according	232	73.5	4	70	journal	308	166.3	4
71	holding	232	73.5	4	71	methodology	304	164.1	5
72	puzzle	231	73.2	6	72	input	301	162.5	4
73	publishing	229	72.5	5	73	oral	297	160.3	4
74	swift	229	72.5	6	74	corpus	292	157.6	6
75	notable	226	71.6	4	75	addition	287	154.9	4
76	opening	226	71.6	4	76	bracket	287	154.9	5
77	wit	226	71.6	5	77	review	283	152.8	4
78	politics	221	70	4	78	talking	281	151.7	6
79	chapter	220	69.7	4	79	progressive	277	149.5	4
80	developed	220	69.7	5	80	competence	277	149.5	5
81	halt	218	69.1	4	81	required	275	148.4	5
82	expected	215	68.1	4	82	dialogue	273	147.4	4
83	spear	215	68.1	<u>7</u>	83	motivation	267	144.1	4
84	queer	214	67.8	<u>7</u>	84	expected	264	142.5	4
85	pity	212	67.2	4	85	works	261	140.9	4
86	cloak	208	65.9	6	86	testing	261	140.9	5
87	flee	205	64.9	4	87	criterion	260	140.4	4
88	bid	204	64.6	4	88	syllabus	259	139.8	6
89	let's	204	64.6	4	89	singular	259	139.8	<u>8</u>
90	chiefly	204	64.6	6	90	repetition	249	134.4	5
91	associated	203	64.3	5	91	validity	247	133.3	5
92	peer	202	64	4	92	finite	247	133.3	<u>7</u>
93	duchess	202	64	<u>7</u>	93	semantic	246	132.8	5
94	doom	199	63	6	94	setting	245	132.3	4
95	publisher	198	62.7	4	95	theoretical	241	130.1	4
96	sexual	197	62.4	4	96	imply	239	129	4
97	pope	196	62.1	4	97	ending	237	127.9	5
98	repeated	196	62.1	6	98	bilingual	232	125.2	<u>8</u>
99	noble	195	61.8	5	99	mixed	229	123.6	4
100	radical	194	61.5	4	100	feedback	229	123.6	5

4.2 語彙面からみたテキストの難易度

前節ではコーパスデータ中の、大学受験、大学一般教養の初級レベル以上の語彙について、それぞれ地域文化研究コース用と言語研究コース用に高頻度語彙リストを作成した。本節では、コーパスデータを構成する各テキストの難易度をそれぞれの語彙から測定した結果を提示する。これにより学生の熟達度に合わせた効果的なテキストの選択が可能になる。

測定には、JACET 8000 分析プログラムである v8an を利用した。v8an は英文テキストからレマ化された頻度リストを作成するプログラムで、レマ化は JACET 8000 に基づいて行われる。レマ化された語彙に、JACET 8000 のレベル指標（1～8）を付与すると同時に、各レベルの語彙のテキストカバー率を算出する。したがって、各レベルの語彙のテキストカバー率を比較することで、それぞれのテキストの難易度の分布が理解できる。たとえば、清水（2003）は、「高校入試英語」、「大学入試英語」、「児童文学」、「児童向け新聞」、*Washington Post*、*USA Today* の英文を v8an で処理しているが、表 3 は Level 3（高等学校の英語教科書レベル）と Level 4（大学受験、大学一般教養の初級レベル）までの語彙がどれだけそれぞれのテキストデータの総語彙をカバーしているかを示したものである。

表 3 より、Level 3 の語彙力では母語話者向けの英字新聞の語彙の 76.5–78.1% をカバーするのみであるが、Level 4 の語彙を持っていれば約 80% までカバーすることがわかる。同時に、2 つのカバー率とも、高校入試英語 < 大学入試英語 < 児童文学 < 児童向け新聞 < *Washington Post* < *USA Today* の順に語彙の点において難易度が高くなっていることを示している。

表 3. レベル 3 / 4 語彙のカバー率

	Level 3 までの語彙 のカバー率 (%)	Level 4 までの語彙 のカバー率 (%)
高校入試英語	92.3	92.9
大学入試英語	89.9	91.8
児童文学 (Bedtime Story)	84.6	85.8
児童向け新聞 (Kids Post)	82.2	83.5
新聞 (<i>Washington Post</i>)	78.1	81.7
新聞 (<i>USA Today</i>)	76.5	80.5

以下、v8an でわれわれのコーパスデータを処理し、各文献中でそれぞれ Level 3 と Level 4 までの語彙が占める割合に基づき、降順にリスト化した結果を、表 4、5 に示す。

表 4. レベル 3 / 4 語彙の「地域文化研究コース」用文献におけるカバー率

著 者	書 名	Level 3まで の語彙による カバー率(%)	Level 4まで の語彙による カバー率(%)
P. Auster	<i>Ghost</i>	92.3	93.5
S. Anderson	<i>Winesburg, Ohio</i>	90.1	91.2
C.S. Lewis	<i>The Chronicles of Narnia: The Magician's Nephew</i>	90.0	90.6
E. Hemingway	<i>The Sun Also Rises</i>	89.1	90.0
C.S. Lewis	<i>The Chronicles of Narnia: The Voyage and the Dawn</i>	88.7	89.5
C.S. Lewis	<i>The Chronicles of Narnia: The Lion, the Witch and the Wardrobe</i>	88.6	89.3
C.S. Lewis	<i>The Chronicles of Narnia: The Silver Chair</i>	88.6	89.4
J.D. Salinger	<i>The Catcher in the Rye</i>	88.4	89.5
C.S. Lewis	<i>The Chronicles of Narnia: The Last Battle</i>	88.1	88.7
C.S. Lewis	<i>The Chronicles of Narnia: The Horse and His Boy</i>	87.6	88.6
D.H. Lawrence	<i>Sons and Lovers</i>	87.2	88.4
C.S. Lewis	<i>The Chronicles of Narnia: Prince Caspian</i>	87.1	87.9
C. Dickens	<i>A Christmas Carol</i>	86.8	88.1
W.S. Maugham	<i>The Moon and Sixpence</i>	86.4	87.6
O. Wilde	<i>The Picture of Dorian Gray</i>	85.6	86.9
G.C. Thornley & G. Roberts	<i>An Outline of English Literature</i>	85.4	86.6
H. James	<i>Washington Square</i>	85.2	86.7
O. Wilde	<i>Complete Shorter Fiction</i>	85.2	86.3
J.R.R. Tolkien	<i>The Lord of the Rings</i>	84.9	85.8
J. Joyce	<i>Dubliners</i>	84.3	85.7
O. Henry	『O. ヘンリー短編集』	83.8	85.3
J. Steinbeck	<i>Of Mice and Men</i>	83.4	84.0
O. Wilde	<i>Salome</i>	83.3	84.0
K. Mansfield	<i>The Garden Party and Other Short Stories</i>	83.2	84.0
A. Christie	<i>Poirot Investigate</i>	82.1	83.5
A. Christie	<i>Collected Short Stories</i>	81.8	82.9
W. Golding	<i>Lord of the Flies</i>	81.5	82.5
J. Culler	<i>Literary Theory</i>	78.6	82.5
M. Drabble	<i>The Oxford Companion to English Literature</i>	67.9	71.0

表 5. レベル 3 / 4 語彙の「言語研究コース」用文献におけるカバー率

著 者	書 名	Level 3 までの語彙によるカバー率 (%)	Level 4 までの語彙によるカバー率 (%)
A. Wray & A. Bloomer	<i>Project in Linguistics: A practical Guide to Researching Language</i>	84.0	88.1
A. de Swan	<i>Words of the World</i>	83.1	87.4
J.C. Richards & T.S. Rodgers	<i>Approaches and Methods in Language Teaching</i>	80.5	87.1
P. Trudgill	<i>Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society</i>	83.5	86.6
G. Yule	<i>Pragmatics</i>	82.5	86.4
Z. Dorney	<i>Research Methods in Applied Linguistics</i>	80.3	86.3
G. Leech	<i>Meaning and the English Verbs</i>	82.1	86.0
R. Carter <i>et al.</i>	<i>Working with Texts: A Core Introduction to Language Analysis</i>	82.9	85.9
H.D. Douglas	<i>Teaching by Principles: An Interactive Approach to Language Pedagogy</i>	80.4	85.9
A.P.R. Howatt	<i>A History of English Language Teaching</i>	81.5	85.7
J. Aitchison	<i>Linguistics</i>	82.1	85.5
J. Holmes	<i>An Introduction to Sociolinguistics</i>	81.3	85.5
L. Bauer & P. Trudgill (eds.)	<i>Language Myths</i>	82.4	85.4
P. Nation	<i>Learning Vocabulary in Another Language</i>	80.8	85.3
D. Crystal	<i>The English Language: A Guided Tour of the Language</i>	81.7	84.8
D.E. Kluge & M.A. Taylor	<i>Basic Steps to Writing Research Papers</i>	81.0	84.3
N. Schmitt & R. Marsden	<i>Why Is English Like That?</i>	81.2	84.3
E.M. Rickerson & B.Hilton	<i>The Five-Minute Linguist</i>	80.4	83.2
B. Bryson	<i>Made in America</i>	79.1	82.0
D. Crystal	<i>Txtng: The Gr8 Db8</i>	76.3	79.4
A. Andrew	<i>Syntactic Theory and the Structure of English</i>	74.4	78.7

表 4 の地域文化研究コース用文献の上位にはカバー率が90%前後と、比較的易しい語彙で書かれている文献が多い。その理由は上位を占める文献は主に児童書 (*The Chronicles of Narnia*) あるいは Retold 版 (*Ghost*) であるためである。同じく上位に位置する *Winesburg,*

Ohio, The Sun Also Rises, The Catcher in the Rye は、それぞれ Original 版であるが、文学的内容理解と別問題として、少なくとも語彙レベルの点においては比較的容易な作品であることがわかる。一方、表5の言語研究コース用文献では、表4と異なり、カバー率を示す数値は全て90%未満で、下位では80%を下回る文献も見られる。未知の語が2割存在するということは、その文献を読み始める段階で学生は英文100語につき20回辞書を引くことが要求されることを意味している。教員は、これまでの自身の読書経験、指導経験から文献の難易度を主観的に判断しがちであるが、表4、5が示す客観的な数値を参考に推薦する文献が学生の熟達度の点から適切であるか否かを判断すれば、より効率的な学習指導が可能になると思われる。

5. 今後の課題

2012年度にコーパスデータに基づくコース別語彙リストとコーパスを構成する文献の難易度リストの一応の完成を見た。しかし、まだ不十分な点およびより効果的な利用のための課題は残されている。具体的には少なくとも以下のものが挙げられる。

- (1) 各語に品詞情報、訳語、例文を付し、より実用性の高い語彙リストへの改訂
- (2) 語彙リストを利用したオリジナル e ラーニング教材の作成
- (3) イディオム・コロケーションリストの作成
- (4) 文法あるいは文体の観点からみた各文献の難易度調査

これらの課題については2013年度に作業を進めたい。また、アンケート調査については、2012年度に主に Can-do 形式に基づいた調査を行ったが、2013年度においてはより包括的な調査を行うことを予定している。具体的には学生の入学動機や学習習慣など様々な質問項目を設けることで、学生の実態を明らかにするつもりである。

参考文献

- 相澤一美, 石川慎一郎, 村田年, 磯達夫, 上村俊彦, 小川貴宏, 清水伸一, 杉森直樹, 羽井左昭彦, 望月正道. (2005). 『JACET8000 英単語: 「大学英語教育学会基本語リスト」に基づく』. 東京: 桐原書店.
- 大学英語教育学会基本語改訂委員会編. (2004). 『大学英語教育学会基本語リスト活用事例集: 教育と研究への応用』. 東京: 大学英語教育学.
- 石川慎一郎. (2008). 『英語コーパスと言語教育』. 東京: 大修館書店.
- 清水伸一. (2003). 『JACET 8000 付属 CD-ROM のプログラムデータ使用法』. 第42回 JACET 全国大会資料

(<http://www.tcp-ip.or.jp/~shim/J8.htm>).

WordSmith = WordSmith Tools Version 5.0. Lexical Analysis Software.

付録：分析に用いた文献リスト

1) 「地域文化研究コース」用

- S. Anderson, *Winesburg, Ohio* (Penguin Classics)
- P. Auster, *Ghost* (IBC パブリッシング)
- A. Christie, *Poirot Investigate* (Harper Collins)
- A. Christie, *Collected Short Stories* (Harper Collins)
- J. Culler, *Literary Theory* (Oxford University Press)
- C. Dickens, *A Christmas Carol* (Penguin Classics)
- M. Drabble, *The Oxford Companion to English Literature* (Oxford University Press)
- W. Golding, *Lord of the Flies* (Faber and Faber)
- E. Hemingway, *The Sun Also Rises* (Scribner)
- O. Henry, 『O. ヘンリー短編集』(講談社インターナショナル)
- H. James, *Washington Square* (Penguin Classics)
- J. Joyce, *Dubliners* (Penguin Classics)
- D.H. Lawrence, *Sons and Lovers* (Penguin Classics)
- C.S. Lewis, *The Chronicles of Narnia* (Harper Collins)
- K. Mansfield, *The Garden Party and Other Short Stories* (Penguin Classics)
- W.S. Maugham, *The Moon and Sixpence* (Penguin Classics)
- J.D. Salinger, *The Catcher in the Rye* (Little, Brown and Company)
- J. Steinbeck, *Of Mice and Men* (Penguin Books)
- G.C. Thornley & G. Roberts, *An Outline of English Literature* (英潮社)
- J.R.R. Tolkien, *The Lord of the Rings* (Houghton Mifflin)
- O. Wilde, *Complete Shorter Fiction* (Oxford World's Classics)
- O. Wilde, *The Picture of Dorian Gray* (Penguin Classics)
- O. Wilde, *Salome* (英光社)

2) 「言語研究コース」用

- J. Aitchison, *Linguistics* (ひつじ書房)
- H.D. Brown, *Teaching by Principles: An Interactive Approach to Language Pedagogy* (Pearson Longman)
- L. Bauer & P. Trudgill, *Language Myths* (Penguin Books)
- B. Bryson, *Made in America* (金星堂)
- R. Carter et al., *Working with Texts: A Core Introduction to Language* (Routledge)
- D. Crystal, *The English Language: A Guided Tour of the Language* (Penguin Books)
- D. Crystal, *Txtng: The Gr8 Db8* (Oxford University Press)
- A. De Swan, *Words of the World* (Polity Press)
- Z. Dorney, *Research Methods in Applied Linguistics* (Oxford University Press)
- J. Holmes, *An Introduction to Sociolinguistics* (Pearson Longman)
- A.P.R. Howatt, *A History of English Language Teaching* (Oxford University Press)
- D.E.Kluge & M.A.Taylor, *Basic Steps to Writing Research Papers* (Thompson Learning)
- G. Leech, *Meaning and the English Verbs* 3rd ed. (ひつじ書房)
- P. Nation, *Learning Vocabulary in Another Language* (Cambridge University Press)
- A. Radford, *Syntactic Theory and the Structure of English* (Cambridge University Press)
- J.C. Richards & T.S. Rodgers, *Approaches and Methods in Language Teaching* (Cambridge University Press)
- E.M.Rickerson & B.Hilton, *The Five-Minute Linguist* (Equinox)

N. Schmitt & R. Marsden, *Why Is English Like That?* (The University of Michigan Press)

P. Trudgill, *Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society* (Penguin Books)

A. Wray & A. Bloomer, *Project in Linguistics: A Practical Guide to Researching Language* (Hodder Education)

G. Yule, *Pragmatics* (Oxford University Press)

Abstract

Improving the English Department Curriculum at Hiroshima Shudo University: A preliminary study

Shinya OZAWA and Kazuho MIZUNO

This is an interim report of our three-year project to investigate the validity of our current curriculum and explore the implications for further development. In 2011, the first year of the project, we conducted semi-structured interviews with the students and made a corpus of the books which teachers recommend the students to read. In 2012, we implemented two investigations. First, we conducted a survey of all the students in our English department and of the companies located in the Hiroshima area. Second, we made a brief analysis of the corpus, and from this created a word list for the students, which is the main focus of this paper. Comparing our corpora with JACET 8000, we found that there are technical terms which should be given priority for learning. We also found that the word level of each recommended book does not always correspond with the teachers' subjective impressions. Therefore, by using our corpus, we will be able to provide a useful objective guide for teachers when selecting books to read and vocabulary to learn.